View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Kwansei Gakuin University Repository

制御か共感か？

――住民による環境調査に見る幸せの形

嘉田　由紀子*

■要　旨

私たちは身のまわりの森や土や水や、そこに暮らす生き物を「制御できる」対象と考えるのか、暮らしに「共感を与える」存在とみるのか？　このような一見素朴な問いが意外と大事な社会調査のパラダイムの違いを隠している。それは、何を調査するべきか、というフレーム構造を提供し、環境政策の方向をも暗黙のうちに規定しているからである。

本論では、まず、環境と人間のかかわりを研究する環境社会学の調査方法論を考える時、いわゆる「社会調査の困難」はより複雑な構造をもつことになることを認識論的に提示する。いわゆる専門家や行政が実証主義的に認識する「環境」の意味づけと、住民が身のまわりの生活環境を考える上での解釈論的に認識する「環境」の意味づけのズレがそこには存在するからである。そのような「環境」の意味づけのズレは、実践論的なポリティカルな位置や調査研究に内在する権力・倫理問題に直面することにもなることを次に示す。

このような認識論と実践論をふまえた中で、筆者たちが過去 20 年以上にわたって企画・実践をしてきた琵琶湖の水環境調査の現場を事例としながら、地域住民自身による調査研究の方法的ねらいを提示し、そこにいかに「当事者による」「創発的」ともいえる「対話的な調査研究」がなりたつか、その方法の可能性を提示したい。

キーワード：環境社会学、環境認識、住民調査、資料提示型インタビュー、琵琶湖

*京都精華大学・滋賀県立琵琶湖博物館

1 「表象化」される日常生活環境

「日常世界とはきわめて確固としていて、動かし難い客観性を帯び……疑いを拒否する特権をもっている」［村上，1979：17–18］。普段、私たちは「なぜ私の目の前にあるこの四角い物体を〈机〉と呼ぶのだろう」というような疑いをもたない。「机」とは、それを〈台〉と呼ぼうが〈デスク〉と呼ぼうが「記号」でしかない。その名称に疑いをもたない。同時に、日常性は「非言語領域」も深くとりこんでいる。机の大きさや材質、さらには、たとえば役所であるなら、その〈机〉の置かれている部屋の中の位置関係で、そこに座る人の社会的役割や地位が「暗黙のうちに表象」される。そこでは、明示的に語ることなしに、たとえば「机が仕事をする」という意味さえ隠しこまれる。

「人は語ることができること以上のことを知っている」［Polanyi, 1966＝1980：16］のである。ポランニーは、特に身体的行動にとっての暗黙知の意味を分析した。ポランニーの暗黙知が「個」を前提にしているのに対して、長い時間をかけた社会的行為の中で集合的に認知される習慣や感じ方ふるまい方をつくりだす構造を、ブルデューは“ハビトゥス”と呼ぶ［Bourdieu, 1980＝1988：82–104］。

「机」が「記号」であり「表象」である、ということは、多くの人たちが、まさに日常生活経験として了解をしていることであるが、「この川はきれいだ」という言説がいかに表象性をおびているのか、私たちが意識する機会は少ない。しかし、このような何気ない言説にも、けっして自明とはいえない、強固な表象連関が埋め込まれている。特に、「自然の領域」と考えられる川や水や山や大地について言及することは、実証可能な事実を表現していると思わされてきた。まして、今、社会問題化されているいわゆる「水質汚染問題」のような環境問題は、それ自体、実証可能な問題と暗黙のうちに信じられている。それが、環境社会学における「環境」のあり方にこめられた自然観となる。琵琶湖の水環境の例からすこし詳しくみてみる。

2　脱文脈化言説にみる実証主義の影

1970 年代中頃、琵琶湖はいわゆる水質汚染問題にゆれていた。1977 年、琵琶湖にはじめて赤潮がでて、「死の湖」と化すおそれがあり、その原因は、周辺から流れこむリンや窒素などの有機物であるという因果関係が提示され、これらの物質の流入を抑えるためにさまざまな政策が採用された。その中でも 1980 年に施行された「富栄養化防止条例」は「リンを含む合成洗剤」の流通や使用を制限するいわゆる「石けん条例」として社会の耳目を集めた。石けん条例施行に至る住民運動は、それまで社会的に発言の場が少なかった女性たちの環境保全運動として、今でいう女性のエンパワメントの役割を果たしたが、同時にこの運動により「琵琶湖の水は汚い」という言説が、その自然的、社会的文脈から切断され、広く流通することになった。そこでは、水質汚染の原因物質としてのリンや窒素を悪者とする「物質還元的自然観」が広まることになった。

古典的な「価値観にとらわれない科学論」からみると、水質科学者は「リンや窒素の物質循環」を扱うことを本義とする。とはいえ、水質科学者が汚染を定義できるわけではない。つまり科学的には物質循環の仕組みを「実証的に」定義できるが、どのような濃度の水質を汚染と認識するか、という回路は社会的判断の中にある。

実証的科学主義に求められる論理は「代表性」と「信頼性（再現性）」そして「妥当性」である。代表性の問題は「平均値」という概念でさしあたって仮に処理される。「琵琶湖の水質」については、すべての水をすべての時間で計測できない現実的状況の中では、水域をメッシュで規則的に区切り、それぞれについての一定時期の水質データを「平均化」することで代表性を担保することになる。「信頼性」は、同質と規定される対象を繰り返し計測しても同一の計測結果がでるような技術的精度を高めることで担保される。

それに対して、「妥当性」はかなりの困難なプロセスを経ることになる。「琵琶湖の水質」という対象に対して、「リンと窒素」という物質を計測することがそもそも妥当であるのか、という問題となる。水の中には無数の物質

が含まれている。その無数の物質の中で、なぜリンと窒素を選択するのか、という問いである。化学的領域での問題であるのか、琵琶湖の水質は、そこに生きている微生物や魚類などの生物的領域であるのか。琵琶湖の水質を計測するのになぜ、これらの生物を計測しないのか、という次なる問題を含むことになる。「水質の定義」さえ、このように多義的な化学・生物的文脈の中で多様な判断を許す。その上で「琵琶湖の水は汚い」という言説はいかに定義されるのか？

3　汚染リスクの文化的文脈と住民の判断
――制御論が補強する公共政策

1970 年代から 80 年代の初頭、世界的に環境汚染問題がクローズアップされる中で、文化人類学のメアリー・ダグラスらは「汚染にかかわるリスクは文化的に定義される」と主張した［Douglas & Wildavsky, 1982］。ダグラスはアフリカのレレ族社会、現代アメリカ社会などを視野に置きながら、それぞれの社会は社会的リスクを評価する固有の価値観をもっており、それは技術的に規定できる汚染リスクとはズレがあることを指摘した。レレ族では稲妻と不妊、アメリカでは喫煙と交通事故が、技術的に測定されうる死者数や死亡率とのずれの因子として説明できるとした。

琵琶湖の水汚染問の汚染指標とされているリンや窒素は、物質としては人間や生き物の体の組成としてはなくてはならないごくありふれた物質であり、物として毒性があるわけではない。水俣病を起こした有機水銀のように、人間の身体にとって毒物である物質とは異なる。湖の中にあって、リンや窒素がなければ、魚も生きていけない。つまり生態系にとって必須の物質である。それを「汚染」と定義するのは、人間社会の側の便宜的ものさししかない。現在の日本社会では、行政的に「環境基準」を定め、ある物質がある濃度以上であることを汚染としよう、という「社会的約束事」をつくっている。

つまり、汚染とは、社会的に構成されたものであり、実証主義的なデータ

はその判断材料ではあるが、定義そのものの論理を提供できない。問題は、このような汚染の社会的意味づけが無視され、実証主義の衣をまとっていることである。その背景には、汚染指標と定義された物質の不可視性がある。リンや窒素は普通の生活状態では目にみえない。目にみえない物質の濃度は科学的な機器による計測という行為を経てはじめて計測される。つまりリンや窒素の濃度を扱うこと自体、科学の領域と認識され、「汚染を科学が定義する」という社会的認識のズレが生じることになる。そして、科学的知識を行政的に操作をする、という「状況の定義」が行政的になされることになる［脇田，1995］。

このような状況定義の中では、たとえば、自分の家の前を流れる水路について、それがきれいか汚いか、という疑問を自分たちの知識や経験によってではなく、科学や行政に判断をまかせるという「白衣をまとった外部専門家」への判断依存状態がひろまることになる。ここでの「白衣」は、「科学」を表象する道具だてでしかない。そして科学的知識への権威すりより型の信頼と判断依存を住民意識の中に蔓延させることになる。このような科学主義は、「水質汚染を防ぐには汚染物質を除去する」という下水道政策のような「近代技術主義」［鳥越・嘉田，1984］による政策手段の有効性を補強する。大規模公共事業により社会を政治的に操作する、という行政管理の立場からはきわめて都合のよい認識体系を準備することになる。つまり、物質として計測可能な窒素やリンを対象にする限り、それを「制御」する科学技術の存在が意味づけされることになる。制御論の論理的、政策的背景がここに用意されることになる。

1970 年代から 80 年代の琵琶湖の環境問題をめぐる状況は、行政による科学主義的判断が権威をもって流布する中で、「琵琶湖の水は汚い」という「脱文脈化」され「表象化」された制御論的な伝聞的言説により、学校現場や地域生活場面で人びとは科学的知識により「教育される対象」とされようとしていた。そこでは「自ら地域環境を知り、自ら環境改善にかかわる」という主体的行動への動機づけは生まれにくい。

そこで、私たちは、科学というパラダイムに生活という文脈をもちこみ、

その中での琵琶湖や水のあり方を求めるという社会調査の手法を編み出すこととした。つまりすでに「定型化された知識体系」が深く広まっている状況の中では、まずその「状況に寄り添いながら」「状況はずし」を企てることから出発するしかないと判断したのである。当時私たちが参考としたのは、調査の姿勢としては宮本常一の「聞き書き」［宮本，1984］、と柳田國男による「郷土生活の研究法」［柳田，1935］と、科学情報の共同化については梅棹忠夫による「知的生産の技術」である［梅棹，1969；嘉田・大西，1992］。

4　鳥の目と虫の目
――生活文脈を語るインタビューから見えてきたこと

1980 年代初頭から、私たちは、琵琶湖流域を、いささか単純な表現であるが、「鳥の目」と「虫の目」の両面から、地域環境調査を始めた。鳥の目では、当時開発されつつあった地図情報システムにより小さなコミュニティ 1,600 毎の地域条件を緻密に積み上げ、琵琶湖周辺の 120 の河川流域とクロスさせながら、河川別のリンや窒素という汚濁負荷量の計算を行い、科学的データの積み上げにより琵琶湖の汚染を説明できるのかどうかの調査検討を行った。これは物質還元主義的に環境を定義するという「状況に寄り添いながら」の仕掛けであった。「制御論」的視点である。これが滋賀県地域環境アトラスというデータベースづくりである。

と同時に地域の「生活の視点」から、琵琶湖や関連水域がどのように認識され、評価されているのか、「あなたにとって望ましい水辺は？」というようなインタビュー手法による調査を始めた。これを虫の目調査と呼んでいる。「状況をずらす」仕掛けである。住民の認識を問う対話的で「共感論的視点」といえるかもしれない。

鳥の目調査からみえてきたことは、実証主義的にみえた汚濁負荷量の計算には数多くの「恣意的な仮定」がはいるということである。つまり社会的に構築される要素を最初から含んでいるということである。たとえば、人間ひとりあたりのウンコ・オシッコの量から、1 匹の家畜の屎尿の量、そしてひ

とつの工場の汚濁物量、すべてがある代表性をもたせたサンプリング調査の「平均値」をユニットデータとして使わざるをえない。また事象同士のつながりも、多くの約束事とパラメータによってなりたっており、その結果つくられる水質モデルのシミュレーションも、仮定だらけの「さしあたっての便宜的モデル」でしかない。つまり流域の物質循環を自然科学として実証できるものではない。仮定がすこしかわったら何がおきるかわからないのである。事実、1980 年代にこれ以上の緻密なデータは不可能というほどの時間とエネルギーをかけてつくった私たちの琵琶湖水質モデルは、その後、予期せぬプランクトン組成の変化などがおこり、おおきな変容を迫られている。

一方、虫の眼調査からは何が見えてきたのか。それは 4 点にまとめられる。

ひとつは、人びとの環境認識は、行政が提案する水質項目というような実証的物質主義に取り込まれきれないゆるやかな広がりをもっているということだった。そのゆるやかな広がりと深まりは「五感」による判断ともいえる。人びとが望ましくないと思っている対象は、視覚的に見ることができる水辺に氾濫する空き缶やタバコの吸殻や、ビニール袋などの「ゴミ」であり、「臭い」や「ぬめり」や「不透明さ」「ぬるぬるした水底の泥」という五感で感じる水や水辺の状態であった［嘉田，1989］。さらに、ゴミとして認識された物質の中には、「湖岸の水草」や「ヨシ」などの本来の自然物も含まれていた。そのような意味で、ゴミとは、社会的に構成・定義されるものであり、実証主義的にゴミは定義できないということもわかった。

2 点目は、生活をシステムとしてとらえる中での物質の意味構造の発見であった。ここには「生活経験」が大きくかかわっている。まず、ゴミとして定義され水草やヨシなどの自然物もかつては生活や生産に必要な物質であり、水草は肥料として人びとが争って採集していた有用物であった。ヨシも自然に生えるのではなく、人びとが刈り取り、半ば栽培しながら、生活の中で利用する有用物であった。つまり「ゴミ」とは物質のもつ内在的な意味ではなく、人びとの生活システムとの関係性の中で、文脈的に定義され「不要」と見なされるようになった物質といえる。ここには、人びとの生活観が

隠されている。

3点目は、水のある場の生物的自然の評価である。「水が汚れた」という言説を人びとが述べる時に引き合いにだされるのが生き物の存在だった。「ここには昔は顔にあたるくらいたくさんホタルがいたのに……」「ここにはボテジャコ（タナゴなどの小魚）があふれるほどたくさんいたのに……」という。ここでひきあいにだされる生き物として多かったのはホタルとタナゴやモロコ、メダカなどの魚類であった。

4点目は、水辺での経験に根ざした生活行為という文脈である。水質的には透明で、そのまま飲めるような場面であっても、人びとは「汚くなった」という。「なぜ？」という問いに、「ここでは昔は子どもが水遊びをしたけど今は子どもも遊ばない」「ここでは飲み水をとったのに今はもう飲めない」「ここでは洗濯をしたのに今はもう洗濯もできない」という。つまり自らの経験に照らして生活行為の中で「かかわりが薄れた」水は汚れていると認識されていた。水道がはいり、洗濯機がはいり、そして子どもは家の中でテレビゲームなどで遊ぶようになり、水と生活との直接的なかかわりが弱くなったことが「水の汚染」の行為論的表現であった。

この経験という時間軸をふまえた行為論的汚染の評価は、現在行政が巨大な投資をして行っている下水道政策のような水質汚染対策の内在的な限界を示すことになる。つまりいくら下水道をつくって、物質としての窒素やリンを除去しても、水辺は自分たちの行為とかかわらない限り、人びとにとって望ましい姿にはならないのではないか。特に子どもたちの認識は深く水との「かかわり」に埋め込まれていた。水域にとって不都合な物質の流入を「制御」しても人びとの水域の評価は高まらないのではないか、という疑問である。

ここでいささか図式的ではあるが、仮説として、科学者による環境認識と生活者による認識の違いを、**図1**のようにまとめてみた。数字と科学的因果関係を重視する中で、科学知は事象の発見と政策提言がねらいとされる。ここには、汚染の定義物質を減少させるという「制御論」が貫徹されている。それに対して生活現場から生まれる生活知世界では、経験に則した五感

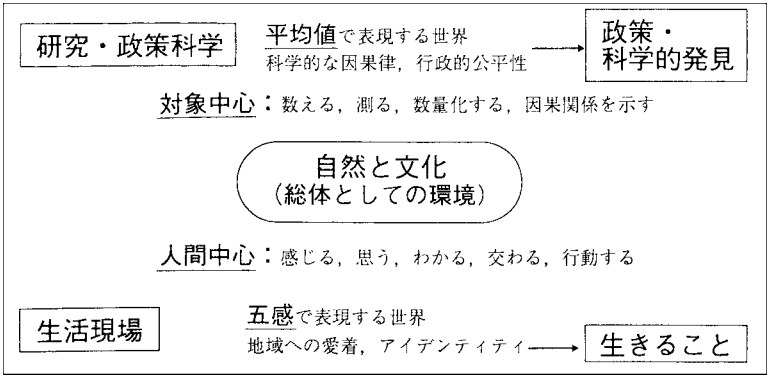

図１　環境認識をめぐる生活者と科学者［琵琶湖研究所編，1992：7］

と感性による認識を重視し、その意味は「生きる」ことにつながることになる［琵琶湖研究所編（嘉田責任編集），1992］。それは、水域や生き物との共感の構造を含みこむものとなる。

そこでこの両者の認識的違いに基づき、水辺の状態を住民自身が自ら調べ、その変遷を自ら知り、自覚する中で、水とのかかわり行為をとりもどすことができるような住民自身による環境調査を企画した。仮説的に想定した「共感の構造」を見極めるためでもある。ここでは、社会調査論の実証主義と構築主義にかかわる議論とからめて、そのプロセスを簡単に論じてみる。私たちがとり上げたのは現場の調査の中で人びとがひきあいに出す度合いの高かった「ゴミ」「ホタル」「水利用」そして「水辺の遊び」である。

5　住民調査に見る認識から実践への展開
――たんけん・はっけん・ほっとけん

1989 年、水路にゴミが多くて汚れてしまった、といわれる地域の人びとからの呼びかけで私たちは、琵琶湖の東部、蒲生町での住民調査の企画にかかわり始めた。まず家いえから流れ出る「排水路」と地元で呼ばれていた水路の探検調査を小学生の子どもと高齢の人たちとともに始めた。つまり異世代共同の環境調査である。そこでは最初からいわゆる美化運動としての「ゴ

ミひろい」をするのではなく、まず「水路にどんなものがどんな状態で存在するのか」という観察と五感による水路調査を提案した。「排水路に流れている水の臭いは？　色は？　その下の泥は？　魚は？」と記述をし、落ちているものを徹底的にスケッチをして、なぜそこにそのものがあるのか、と考えるような働きかけをした。その結果、子どもたちはヘドロのような泥がたくさんたまっている水路でも、トンボのヤゴやザリガニなどの生き物がいること、水路に落ちているものは、自分が好きなお菓子の袋であったり、お父さんが好きなコーヒーの空き缶だったりすることを発見した。

そして当時 60 歳代の西堀明枝さんが何げなく発した会話から、その水路はかつて「みぞっこ」と呼ばれ、お茶わんを洗ったり、洗濯をしたりする生活の場であったことを知った。西堀さんはあえて、意図的に「みぞっこ」と表現したわけではない。彼女はそれまでの行政の会議などの席では自分でも「排水路」と言っていた。その同じ人が、現場を歩き、昔の暮らしを思いおこしながら口をついてでた言葉が「みぞっこ」だった。本人も「排水路」と呼んでいた自分を発見して驚いていた。実は西堀さんは、地元では有名ないわゆる「石けん運動のリーダー」である「石けんおばさん」だった。彼女自身、長い間、水路のことを「排水路」と呼んでいた。つまり石けん運動という社会文脈の状況下で、彼女はいつのまにか、「みぞっこ」を「排水路」と呼ぶ自分に変身していた。「排水路」という呼び方に制御論的発想が隠されていたといえるだろう。

ところが、私たちと水路歩きをはじめて、私たちが、「昔の洗濯はどうしていた？　お茶わんはどこで洗った？」と問いかけをする中で、水路に深く結びついていた身体感覚に染み付いた暮らしを思いおこし、「みぞっこ」という表現が思いおこされてきたのだ。一種のハビトゥスの転換ともいえるかもしれない。つまり、排水路という呼び方は、不要な水が流れるという行政用語である。そのような行政用語は、最初に述べたような物質還元主義の中での制御論的価値観に基づいている。それが「みぞっこ」という生活の中での、水と深くかかわる生活の共感の中での水路の意味を再生することで、水とのトータルなかかわりが復権されることになる。

宮原浩二郎の表現を借りると、「排水路」が「アタマ言葉」であるなら、「みぞっこ」は「カラダ言葉」といえる［宮原，2000］。西堀さんが「みぞっこ」というカラダ言葉を呼び戻すことで、子どもたちの水路への見方も変わり、親や祖父母の世代の暮らしの中で生きていた水路の意味がよみがえり、自分たちとかかわりをもってせまってくることになる。

この心の働きの変化を、私自身は「環境の自分化」と表現した［嘉田，2001］。それまで目をむけることなく無視をし、学校や行政から教えられるままに汚いと認識していた排水路が自分たちに親しみをもって迫ってきたのである。そんな「みぞっこ」にはザリガニやトンボのヤゴなどの生き物もいる。そこには自分たちが捨てたものがたくさん落ちている。この落ちているものは自分たちでひろおう、という行動がおこり「みぞっこクリーン大作戦」がはじまった。子どもたちの行動は大人の働きかけからというよりは、子どもたちの発想からおのずと誘発された。

このような子どもたちの認識の変化と行動の創出過程を、地元の活動のリーダーであった蒲生東小学校の井阪尚司さんが「たんけん、はっけん、ほっとけん」と名づけた。調査をして、発見をして考えて、そして、行動が誘発されるというプロセスである［井阪・蒲生野考現倶楽部，2001］。ここには、現場調査が思考を深め、そして行動へと展開をして、認識から行動への動きが起きたことがわかる。「ゴミ」や「排水路」という言語的表現のもつ表象性が改めて問われたことにもなる。モノとしての漂着物は、人間との関係性の中でゴミとなっていたといえる。排水路と呼ばれた時の物質還元論は子どもたちにとっては、いっしょに歩いた西堀おばさんの口をついてでた「みぞっこ」という表現の再生で、具体的に対話可能な意味をもつ存在にかわった。

ここで、**図 1** で提示したような、私自身の仮説的な図式も現場の状況の中でくずされたことになる。私自身は、ここにスリリングな概念の破壊と創生を見る思いがした。この頃から、「制御論」とは異なる「共感論」の筋道を私自身は感じはじめた。

6　ホタルは人間化した虫
――コミュニティ型かかわりとアソシエーション型かかわり――

前述のように、多くの人びとは水辺とのかかわりを「生き物」を介して表現をした。その引き合いにだされる度合いの高い生き物が、当時「きれいな水辺」の表象物と思われていたホタルだった。ホタルは人びとが水辺の変遷を語る時のいわば「準拠生物」ともいえる。そこで、次に、「減ってしまった」といわれるホタルはどこでどれくらい減っているのか、そもそもホタルはどのような水辺にすんでいて、人びとの暮らしの中でどのようなかかわりをもっているのかという「問い」としてとりあげた。

琵琶湖周辺の人びとに呼びかけて、1989 年から 3 年間に滋賀県内で 3,000 名近くが参加をして、のべ 50,000 日に及ぶ観察をそれぞれの身のまわりの水路や川で行った。その結果、「もう居ないだろう」と思いこんでいたホタルであるが、ホタルは開発がすすんだ町の近くの水路にも、圃場整備が進んだ水田の排水路にもしぶとく生きていたことがわかった。そして人びとは「居ない」という伝聞情報への疑いをもちはじめた。さらに一般的に信じられていた「ホタルはきれいな水に住む」という言説へも疑問がわいてきた。分布調査の結果、最も水質のよい山間部よりも、「ほどほどに栄養分のある」つまり、「汚れがある」人里近くに多い、ということもわかった［遊磨，1992］。その上、ホタルが住むには水質以上に、そもそも「水が流れていること」というあたり前の発見もあった。特に流域の土地改良が進み、稲作期間でない冬の水が流れなくなり、「常水（じょうすい）」がなくなったことがホタルの生息に大きくかかわっていたこともわかった。「自分の身のまわりの環境を自分たちで知る」という意味での成果は伝聞情報の限界と、多義的な環境の意味を住民自身が発見することにあることもわかった。

と同時に、調査コーディネーターとしての私自身が発見したことは、ホタルは人びとの過去の人間関係の中に深く浸透した「人間くさい生き物」であるということだった。ある人は、ホタルを介して、子ども時代、ほうきをもって共に蛍狩りをした戦死をした友人を思いおこし、ホタルを発見した夜に

は「友人がかえってきたようだ」と述懐をした。またある人は、水田の見まわりから帰るときにホタルをいっぱいお土産にもちかってくれた父親を思いおこしていた。ホタルつかみのために麦わらのホタルかごを編み、菜種ガラでほうきをつくり、ホタルの歌をうたいながらつかんだ思い出を語る人も多かった。「ホタルつかみの籠を編みながら、すでに心はホタルの世界へとんでいた」という。ホタルは人びとの日常の暮らしに深くはいりこんだ人間関係を反映する「人間化した昆虫」であることがわかった［嘉田，1992；水と文化研究会，2000］。ここからも人と人のつながりの中に生きていた生き物や水辺、という新しい意味が補強された。

ホタルが人間くさい生き物であることから、ホタル調査へのかかわりの動機にもおのずと「人くささ」が反映されることになる。ホタル調査にかかわった人たちとの会話や発表会、作文集などで、「なぜ調査にかかわったのですか」という動機を私自身は尋ね続けた。その中からみえてきたのは、明らかに理念型的にみるとふたつのタイプの人たちがいたということだ。ひとつは、ホタルそのものを対象化し、その生息条件や科学的知識を求める科学知型ともいえる人びとであり、私は「アソシエーション型」の動機づけと名づけた。つまり「ホタルの生態的知識」という目的を求めて、アソシエーション的動機をもっていたといえる。もうひとつは、ホタルの生態に興味があるというよりは、知り合いや人とのつながりの中で「おつきあいをきっかけに」かかわってきた「コミュニティ型」と呼べる人びとである［水と文化研究会，2000］。図式的であるが、前者が制御論的な科学的知識に興味がある傾向の人たちといえ、後者が、人と人、人とホタルのつながりを重視する共感論的感覚が強い人たちといえるだろう。

アソシエーション型的な傾向をもつ人にとっては、たとえば「ホタルが発生するのは気温が 20 度になった時だ」というホタルの生息条件の発見などが重要になるが、コミュニティ型の人にとっては「家族みんなでホタル観察にでかけられることが何よりも幸せ」という感想となる。

しかし、このような動機による分類も結果としては便宜的なものでしかない、ということも次第に明らかになってきた。つまり初期の動機づけは、自

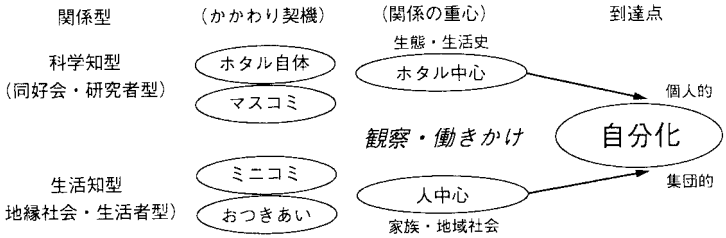

図２　ホタルと私の関係性（動態モデル）［嘉田，2000：206］

分で調査をし、その結果をお互いにもちより、交流する中で、次第に成長していく。**図２**に、それぞれのタイプの人たちの動機づけの成長過程を図示した。

いずれのタイプの中にも、それぞれの興味とかかわりを深める先鋭的な人たちが現れた。科学的知識を求める人たちの中には、たとえば山東町の口分田政博さんがいる。彼はホタルの生態条件を気温や水温などの環境条件とかかわらせて何年にもわたる独自のデータを蓄積し、幼虫の上陸時期からホタルの発生日を予測する科学論文を書いた。またコミュニティ型の人たちは、どちらかというと家族、地域社会という人のつながりを重視する傾向にある。典型は、大津市の荒井紀子さんで、ホタル観察を発展させて、毎年ホタルの時期に「ホタルコンサート」を開き、地域の子どもたちを巻き込み川の保全活動などを始め、2004 年現在もこの活動を続けている。

図３には、ホタルを介して、いかにホタルの生態と、人の社会関係が展開していったかを模式的に示した。そして、このふたつの世界が現場で新たな価値を生み出すことになる。たとえば、口分田さんはもともと科学的知識を求める傾向にあったが、幼虫上陸によりホタルの発生日を予測しようとした動機は、町のホタル祭りの日程をできるだけ正確に決めたいという地域住民としての欲求であった。またその幼虫上陸の観察会を、「ホタルの幼虫上陸をはげます会」と名づけ、感性的表現を編み出し地域の人たちの共感の輪をひろげていった。ここには科学的制御論が、生活的共感論と共鳴しているありさまがみえる。最初の仮説的な二項対立的な科学論と生活論、制御論と共感論は、融合的に昇華されることになった。

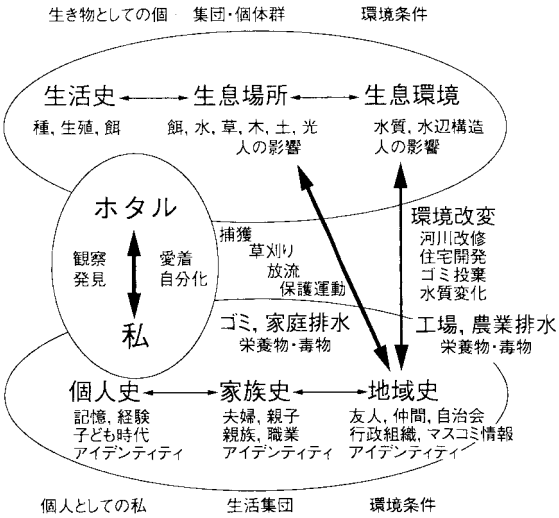

図３　ホタルと私の関係性（静態モデル）［嘉田，2000：212］

今、いずれのタイプの人たちも、毎年の観察を続け、ホタルを観察するという習慣をつくりホタル調査を「自分化」しつつある。3 年計画ではじめたホタル調査は「続けたい」という要望が高く、結局、15 年以上を経た 2004 年でも、その調査ネットワークは維持され、水と文化研究会という住民団体の手により毎年の報告書を出版している。多くの人たちは「ホタル調査」に幸せを見出したようでもある。その一人ひとりの幸せの吐露の一部は、出版物としてまとめられている［水と文化研究会，2000］。

「水利用」の調査は、滋賀県内 600 ヶ所の集落を対象として、ホタル調査にかかわった人たちの中から 50 人ほどが有志として、1992 年から 1995 年にかけて行われた。その結果は琵琶湖博物館の「昭和 30 年代の水利用、冨江家展示」として、生活情景のまるごと復元を行い、社会表現されている。1996 年に開館した琵琶湖博物館の人気の展示となり、2005 年 3 月までに、琵琶湖博物館は 500 万人の来館者をむかえた。特に小学生の「昔の暮らし」学習では「定番」の学習場所となっている。孫をつれてきて、「おじぃちゃんが子どものころは……」と語る人たちの顔は明るい。しかし同時に、「こんな展示みたくない。私はこういう家で苦しい嫁の時代をすごした」とい

い、見るのを拒否する女性もいる［嘉田・古川，2000］。この調査で収集された 12,000 枚の写真データベースは、琵琶湖博物館ホームページを通じて公開されている。

「子どもの遊び」については、1992 年から 1995 年にかけて、小学生が今の自分が水辺でどのような遊びをしているか自己記入のアンケートを行い、類似のアンケート項目票により、それぞれの父母世代、祖父母世代に聞き取りを行うということで、合計 6,000 名ほどの人たちの「三世代交流型アンケート調査」として行った［嘉田・遊磨，2000］。琵琶湖博物館でもパソコン画面を通じてこの内容が公開されている。

「水利用」や「遊び」をテーマにとりあげることで、水辺へのなじみが深まり、身近な環境を「自分化」するといううごきが各地でおきている。

7　環境は土地の記憶の中に集約される
――言語化されない大地の文脈をどうとらえるか

上記のようなインタビューを各地で続けながら、また住民自身による環境調査企画を推進・実施し、琵琶湖博物館の企画を練りながら、私自身には、なにか「かゆいところを靴の上から掻く」というような不満が残った。人と人の関係性を探る社会学的調査に加えて、環境社会学的調査では、人と自然のかかわり、という土地の文脈的なフレームが求められる。環境の履歴は大地の歴史と、人びとが土地とかかわった記憶に凝縮されているはずである。人類が日本列島に住み着いて以来の 1–2 万年の間の記録と記憶は、昭和 30 年代まで比較的継承されていた。昔話の桃太郎に象徴される「おじぃさんは山に柴刈りに、おばぁさんは川に洗濯に」という生活の記憶は昭和 30 年代まで確実に引き継がれていた。それが今、1 世代で大きくかわりつつある［嘉田，2000］。

そのような記憶の中から忘れられ、語られることもなかった川や水辺に働きかけをし、住民調査をよびかけ、前述の蒲生町の西堀明枝さんが「みぞっこ」というカラダ言葉を思いおこしたように、水とのかかわりの記憶がほり

おこされ、伝達するための舞台づくりが私自身の役割であると考えた。

環境社会学的調査の認識論的困難は、もとより項目主義的なサーベイ調査ではのりこえられない。しかし、それは生活文脈的な聞き取り調査だけで埋めることができるのであろうか。答えは「否」である。インタビュー手法の中で、過去、くりかえし議論されてきたテーマに、インタビューの「言語的様式の制約」の問題がある［桜井，2002：30］。

ポランニーが「暗黙知」として分析したように、人は知っていること、経験していることをすべて言語化しているわけではない。まして、生きてきたそのままを記憶しているわけでもない。記憶は選択的であり、その上、語ることはさらに、状況依存的となる。桜井がE・ブルナーの「生の三様態」として指摘するように「生活としての生 life as lived」は、「経験としての生 life as experienced」とも、「語りとしての生 life as told」ともギャップがある［桜井，2002：31］。生活としての生は「外的な行動として現れた振る舞い」であり、外部的にも観察可能である。それに対して経験としての生は「語り手のイメージ、感覚、感情、欲望、思想、意味」である。

環境社会学的調査において、「人と人の関係」と「人と自然の関係」という多重構造の中で関係論的見通しを深めるためには、言語化されていない、いわば「暗黙的空間の了解」を描きだす方法論的仕掛けが求められる。その上、大地は、共同体や地域社会により集合的な記憶を刻みこんできた［嘉田，1997］。ブルデューの言う実践的構造「ハビトゥス」を調査方法論の俎上に乗せることが次の課題となった。

そのような中で編み出されたのが、写真提示による聞き取り調査である。これを「写真資料提示型インタビュー」と名づけ、琵琶湖の環境が大きくかわる前の昭和30年代の生活写真を発掘し、その現場を訪問し、そこに写る人びとを探しだし、生活当事者の経験と記憶からそこでの生活情景と生活行動を引き出すという方法を模索しはじめた。琵琶湖辺で集めた写真は数万枚にのぼる。それらの中から100枚程度を選びだし現場訪問を始めた。1990年代中頃のことである。

8 「汚染」認識は人と人の関係性の中に埋め込まれていた

写真 1–1　琵琶湖畔の朝、1956（昭和 31）年 8 月 5 日（前野隆資撮影、琵琶湖博物館収蔵）。

その中からいくつかの例を示してみよう。まず、琵琶湖の中に浮かぶ沖島という地域での昭和 30 年代の水辺の例である。**写真 1–1** は、1956（昭和 31）年 8 月 5 日の早朝の湖畔の風景である。この写真をもって沖島を 1993 年に訪問を始めた。そこに写っていた人たちはすぐに分かった。サンバシのなかほどで鍋を洗っている女性は茶谷よし子さん、その右で手ぬぐいを肩にかけて、立っている女の子は茶谷さんのお嬢さんのあい子さんときみ子さんである。1993 年段階でよし子さんとあい子さんは沖島に居住していた。そこでよし子さんたちにこの写真を見ながら、当時の湖岸の水使いについて聞き取りをした。以下はよし子さんが写真を見ながら、問わず語りに語りだした言葉である。

・朝いちばんに、ご飯炊きもって（ながら）、きれいな水を汲みに（浜に）さがらんと（いけない）。米かしたり（といだり）、汚さはるとかなわんで。バケツで 2 回。水がめに 4 杯はいった。漁師にいかんならんで、朝 3 時頃におきて、皆したわな。（家族よりも）先におきてご飯こしらえて、うみ（湖）もぼーっとあかるうなってきたら、もう漁師に皆でかけはるんや。

・晩くらくなってからも、浜へおなり（洗い物）しにさがる。風呂の水も浜で汲む。木の桶で 7 回くらい。お米かしたり、漬け物洗ったりするのは元のほうで。先のほうをよごさんようにした。後の人がくまはるから……。

・オムツは、家で、下バケツであろうて、浜へさがってゆすぐ。サンバシではなく、舟つき場で。港の先の舟つき場で。魚でもサンバシのところにようけいいた。ご飯つぶなんか、喜んでたべたわな。オムツのウンコでも、すぐに魚がつきよったわなぁ。
・（あらいもんをする時は）灰よな。わら灰。灰はナベのふち、ふたにでものせていって、網のたわしで。漁師のつこうた網のたわしこしらえて。おひつだけは、シュロのたわしで。おひつやら木の桶はシュロので。ひつらこい（しつこい）汚れはイシコいうて、磨き粉で。あらいもんは皆、浜や。家にはもう水ってあらへんだでな。
・水がめは飲み水とおかず炊いたり、お米炊いたりする折に使い水をいれておくだけ。水はそのまま、こさいでも（こさなくて）のんでたわな。昔はうみがもっとすみきってあったなぁ。うつくしかった。

このサンバシを利用していたのは、周囲の家 6–7 戸である。島には、このようなサンバシが 50 メートルおきくらいにあり、それぞれに材料を持ち寄り橋をつくり、共同で利用していた。台風の時などは、サンバシを浜にあげて避難もさせ日常の維持管理をしていた。茶谷よし子さんの語りからは、たった数メートルのサンバシであるが、砂浜の元のほうとへさきとで、「微細な使い分け」がなされていたことがわかる。特に先の方は後の人が飲み水に汲むのでよごさないように注意していたこと、オムツなどの汚れものは、このサンバシではなく離れた舟つき場で洗ったこと、湖の水はこさずにそのまま飲んでいたことがわかる。湖の水を直接に飲むことができたのは、自分もそこを汚さないようにすると同時に、そのサンバシを使う人びともそれを汚さない、という「社会的仕組み」が隠されていたことがわかる。その社会的仕組みが、湖水を直接に飲むという「水への信頼」を支えていたことにもなる。

言い換えたら「汚染」は物質的な水質状況でもなく、また、先に述べた行為的つながりだけでなく、「人と人の関係性の中で定義される」とも解釈できる。ここでは、人の信頼というような言葉は直接には語られていない。し

かし、それは情景の中に隠されていた心性ということになるだろう。これをたとえばアンケートで「あなたは水を信頼していましたか」と問うことで返答されるだろうか？

9 「汚染」は人と生き物の関係性の中でも定義される

さらに**写真 1–1** を見ながらよし子さんは以下のように語る。

・お釜のごはんつぶを洗うたら、すぐにジャコがつきよった。ジャコが争ってごはんつぶを食べたわな。それが見えたわ。水はすんでいたわ。浜にはシジミもようけいいたわ。朝、顔を洗いに浜におりて、シジミをつかんでそれをおみそ汁にもしたわな。

この写真の中にうつる少女のあい子さんも思いだしながら語る。

・私ら、サンバシの上からたも網でジャコをすくったわ。サンバシの陰にはようけ、ジャコがかくれていたさかい、子どもでもすぐにとれたわ。ジャコは甘辛く炊いておかずにしてもろうたわ。

・浜はシジミの殻がたまっていて、貝殻浜いうてね、あるくとさくさく音がしたわね。

・ジャコもシジミもようけいいて……。お鍋の汚れもんもエサになったんやさかい、まわりまわっていたんやわね。

つまり、ここでは、人間が暮らしの中で洗い流すご飯つぶなどの不要物が、水の中で魚の餌となり、その餌で育った魚を子どもたちが捕獲して、それをおかずにして食べるという「物質循環の系」が成り立っていたことが語られる。シジミもやはり簡単に捕獲され、味噌汁になる。そこには、人びとが生き物に対しても食す、という「信頼関係」が成り立っていたことも隠されていた。もちろん、地元では「物質循環」などという表現はしない。奥村あい子さんは「まわりまわっていた」という。

実は、この写真を入手する前にも、私自身は 1980 年代初頭から同じ沖島で水利用調査をしていた。そこでは、湖水を直接飲み水にしていたこと、お

むつのようなシモノモノの洗濯などをする時には、別の洗い場があったことなどを聞き取りしてきた。つまり言語的に記憶され、表現される範囲での聞き取り調査は行っていた。しかし、この写真をもって沖島を訪問した時の人びとの語りによって始めて、次のようなさらなる情報と情景が付加された。

（1）写真により空間配置が話者に回想される中で、「微細な場の使い分け」が表現されたこと。

（2）「湖水を飲む」という感情の背景には、「近隣の人たちの生活行為への信頼」という社会的仕組みが隠されていたこと。

（3）人間の排出するものと、それを食す魚類、その魚類を食べる人間という、物質循環が埋め込まれていたこと。

桜井厚［2002］の言葉を借りると、この 1 枚の写真は、人びとが洗いものをしているという「外的な行動として現れた振る舞い」である「生活としての生」であるが、そこには「経験としての生」が、感情、欲望、思想、意味として付加されたことになる。特に目にみえる観察可能なモノの世界の背景に、人と場の関係性が「デキゴトの世界」あるいは「イベント記憶」として埋め込まれ、そこでの「意味記憶」が、人と人の信頼関係というようなココロの世界として誘い出され語られたことになる。

沖島でのこの写真の意味について補足したい。実は、昭和 30 年代の沖島の写真を、前野隆資さんは「封印」して発表をしていなかった。前野さんは地元では有名なアマチュア写真家でさまざまな写真展に出品して賞も得ていた。しかし、この沖島の写真は、前野さんは「地元の人たちに断らずに隠しどりをしたので発表を躊躇した」という。そこで、1993 年にこれらの写真をもって前野隆資さんとともに沖島にいき、島の自治会長さんに呼びかけてもらって、写真の中に写っている島の人びとにみてもらった。その一枚が、**写真 1–1** での茶谷さんの語りである。そこで沖島の人たちは「確かに自分たちはこんな暮らしをしていた。でも写真など一枚もない。当時は学校の記念写真くらいしか写していないから」という。そして「よくこんな写真を残してくれた、ありがたいことや」と口ぐちに言われた。前野さんは、「長い間、咽の奥に詰まっていたとげがとれたようだ」と喜んでいた。

写真 1–2　沖島、写真 1–1 と同じ場所、同じアングル。左の人は写真 1–1 の茶谷よし子さん、右の人は同じく写真 1–1 に写っているよし子さんのお嬢さんのあい子さん。1997（平成 9）年 8 月 12 日（古谷桂信撮影、琵琶湖博物館収蔵）。

写真 1–2 は、**写真 1–1** の同じ場所、同じ人にたってもらった場面である。沖島では 1961（昭和 36）年に上水道が、1983（昭和 58）年には下水道が完成し、物質論的にいえば、琵琶湖の汚染源となる人間の家庭排水は下水処理場でカットされ、水質管理の制御論的な生活環境づくりは完成した。

問題は上水道ができて、下水道ができても、人びとは湖がきれいになった、とは思っていないということだ。同じく沖島の小川一次さんはいう。「昔は屎尿はみんな畑にもっていって作物にあげたわな。それが今、水洗便所から下水道で水に流すんやさかい、いくら処理場を通っていても、最後は琵琶湖に流れるんやし、それはきれいとはいえへんわな」と。

10　湖畔の桟橋での洗濯と流れついた乳母車

今、沖島で浜辺は漁業倉庫がつくられ、浜ははるか「遠く」なった。しかし、この空間利用の記憶は生きている。たとえば、お葬式や祭りなどで大量に料理をする時には、この場所に盥などをもちだし、野菜を洗い、屋外料理がなされている。「場所の記憶」は継承されている。

写真 2–1 は、同じく 1955（昭和 30）年頃の琵琶湖の西部、マキノ町（現在の高島市）、中庄での湖岸の洗濯場面である。湖に張り出した小さな橋（サンバシ）の上で若いお母さんらしい女性が、バケツを横において洗濯をしている。その洗濯をしている姿を、乳母車から 1–2 歳の赤ちゃんが身をのりだして見ている。何げない光景であるが、これを写した前野隆資さん

は、「浜を歩いていた時、この母子に出会って、なんともなごやかな気分になって、シャッターを押した」という。

写真 2–1　洗濯をする母親と乳母車のあかちゃん、1955（昭和 30）年頃（前野隆資撮影、琵琶湖博物館収蔵）。

この洗濯女性を探しあてるまでに実は数年かかった。遠景がなく場所の特定がむずかしかったからだ。ついに 1996 年の夏、写真をもって湖岸を歩きながら、この写真の女性を探しだした。中野きみさんという。この写真をみて、「これ、私や！」ということになり、以下のように語りがつむぎだされた。

「この乳母車は、ええとこの乳母車です。藤でできている上等のものですわ。うちらのところではかえません。大風がふいたよく朝、浜に流れ着いておったもんや。きっと神さんか仏さんが授けておくれやしたんやと思うて、8 人の子を育てるのに使わしてもらいました」ときみさんはなつかしそうに語ってくれた。きみさんにとって、湖は恵みや福をもたらしてくれる場であり、そこからいただいた乳母車で子どもたちを育てたという。

11　社会変容を写す今昔写真
――中学生による「よみがえれ写真たち」活動

写真 2–2 は、写真 2–1 と同じ場所で、1997 年当時の中野きみさんである。洗濯機がはいり、洗濯こそ、家の中で水道をつかって行うが、洗濯ものを干すのは今でも湖岸でなされている。ここでも、場所の記憶は継承されているといえる。

過去の生活写真を基に、生活記憶を引き出そうという試みはその後、地域自治会や学校に呼びかけて新しい流れとなっている。その中のひとつ、今津町（現在の高島市）の今津中学校では、2003 年、2004 年の 2 年続きで「よみがえれ写真たち」という総合学習を 3 年生全員（それぞれ約 150 名）によって行った。地元のアマチュア写真家が撮影した古写真（ここでは、石井田幹二さんという写真家が 3 万枚ほどの古写真を残している）や、自分の家のアルバムから探しだした古写真をもとに、その現場を訪問し、関係する人びとに聞き取りをしながら、環境や生活の変化を調査した。

写真 2–2　写真 2–1 で洗濯をしている女性、中野きみさん。写真 2–1 とほぼ同じ場所で。1977（平成 9）年 6 月 7 日（古谷桂信撮影、琵琶湖博物館収蔵）。

写真 3–1　今津の湖岸の足げた。1960（昭和 35）年頃と思われる。遠方の山の雪から季節は春先であろう。

その中からいくつかの事例を紹介しよう。ひとつは、先ほどの中野きみさんのひ孫である桑田香里さんが偶然に今津中学校におられたことから発展したものである。桑田さんは、きみさんが乳母車で育てた 8 人の子ども（そのうちの一人が香里さんのおばあちゃん）が何人の子どもを生んだのか、という家系図を 2 ヶ月あまりかけて作成をし、合計 120 名の人が家系図につらなることになった。今は浜で洗濯をすることなど想像

だにできない桑田さんの世代であるが、人の家系図がつながるなかで、ひいおばあちゃんの生活様式は、遠いどこかの出来事ではなく自分に深くかかわるものとなったようだ。

中野きみさんの洗濯写真に触発されて、今津湖岸のサンバシの古写真を探しだし、その調査をしたグループも現れた。その中の荒井美香さん、江端美弥子さんは、**写真 3–1** と**写真 4–1** を地元の知り合いから提供され、その同じ場所を訪問して**写真 3–2** と**写真 4–2** の現在写真を撮影し、水辺の変化を調べた。いずれも今津の琵琶湖岸である。湖岸のサンバシは今津あたりでは「足げた」と呼ばれていた。写真をもとに多くのお年よりに聞き取りをした結果わかったことは「足げたを使い家事など湖辺でした」「琵琶湖の水は生活用水として使われた」「フナやアユなど多くの魚がいた」「水がキレイで、湖底の石を見ること

写真 3–2　写真 3–1 と同じ場所、足げたは 1 本もない（2004 年 12 月）。

写真 4–1　1940（昭和 15）年頃、東京からのお客を向かえ足げたのところで記念写真を撮影。

写真 4–2　写真 4–1 と同じ場所、浜に人影はなくビルが建った（2004 年 12 月）。

ができた」「波打ち際の砂は細かかった」「子どもは水泳をして遊んだ」「浜辺には人がたくさんいてにぎやかだった」ということである。

そしてふたりが提案していることは、「人の生活と琵琶湖がもっとかかわりあえるようにしたいと思った」「そのために足げたを今の琵琶湖に復活させたい」ということである。水質の改善はもちろん願望していることであろう。しかし中学生は環境の回復には「人と湖とのかかわりあい」の再生を求めているともいえる。ここにも共感論的な環境認識の意味をみることができるだろう。

12　Missed opportunity の研究と琵琶湖の生活環境史研究

本企画の主要課題である「人類の幸福に資する社会調査」の基本的構想において、研究代表者の高坂健次は「幸福の加算」と「不幸の軽減」がその研究アリーナになりうることを示唆している。そして高坂は幸福の社会学の研究領域として、4 つの象限を想定している。主体としての「市民か」「社会学か」、対象としての「幸福の実現か」「不幸の軽減か」というふたつの軸の組み合わせで 4 つの領域が想定できる。「市民としての幸福の追求」「市民としての不幸の軽減」「社会学としての幸福の追求」「社会学としての不幸の軽減」である。

そこでの高坂の社会学への期待は、「過去の不幸を訪ねて現在や未来の不幸を軽減する」という姿勢を、missed opportunity の研究としている［高坂，2004：29］。「過去の不幸の事例を認識して、幸福の追求における希望と同じ働きをもたせる」ためともいう。そして、missed opportunity の研究の方法を、ベトナム戦争や水俣病などの事例をあげながらその方向を示す。その目的は、これらの不幸についてその拡大過程をたどり、分岐点を探索し客観的判断を下すことではなく、不幸の回避あるいは不幸の軽減という視点からみたら不適切な判断を下すにいたったモトを抉り出すことにあるという［高坂，2004：34］。

その「モト」とは、具体的方法から離れてのメタな方法的基準である。高

坂が論じるのは次の 3 点である。

(1) 非自明性：決して誰の目にも明らかな当たり前のものではない原理を伝えること。

(2)「構造－行為－イメージ」の三層図式：行為は構造によって突き動かされるのではなくイメージにより媒介的に規定されることを意識化すること。

(3) 非均質性：異質的なるものの同時性ないし、非同時的なるものの同時性に着目すること。

前項までで紹介をしてきた、琵琶湖の生活環境の変遷を住民生活の立場から住民とともに研究するという私たちの姿勢は、まさに高坂の言う missed opportunity の研究ではないだろうか、と今考える。

琵琶湖の問題は水俣病との同時代性をもっている。水俣でチッソ水俣工場による有機水銀の排出による激甚公害がおきていた「昭和 30 年代」、水資源開発の拠点として下流の大阪・神戸に多量の水を供給するための琵琶湖総合開発がすすみ、一方で農業県から工業県へという琵琶湖周辺での経済構造の変化が進みつつあった［嘉田，2002］。そこで発生してきた水汚染問題は、本論のメインテーマであるような物質還元的な汚染論で専門家や行政によって「社会問題化」された。その中で生まれてきた石けん運動も下水道政策もモノ論に基づいた制御論的パラダイムが主流であった。もちろん、過剰な栄養分や有害な毒物は水域に流れ出ないように管理する必要はある。しかし、それだけで水質汚濁問題が解決できると思ってしまったところに判断の限界があった。

本論でもみてきたように、下水道が完成しても人びとの水辺への信頼も愛着も生まれるわけではない。むしろ逆である。そこには、「人間がかかわる湖」「人間がかかわる生き物」、という共感の構造が行政にも専門家にもイメージされていないのである。そして、流域下水道という莫大な公共事業投資を許す社会的構造をつくりだしてしまった［嘉田，2003］。

ここに、環境政策を生み出してくる行為論を規定してくる、「構造」「イメージ」「行為」という高坂の三層図式論がつながってくる。ここでいう「イ

メージ」は「言語化」の領域である。「排水路」が「みぞっこ」に転換する言語的イメージの世界から、さらに、本論の後半でみてきたように、水辺の立体的な生活場面という映像イメージとも切り結んでくる。

そして、今、水道があり下水道があることがあたり前の子ども世代にとっては、たとえば今津町（現在の高島市）の中学生のように、サンバシで洗いものをしてきた時代、人びとの生活のにぎわいに満ちていた湖辺を取り戻したいという願望となって、非均質な「過去」と「今」を「未来」につなごうという主体性がみえはじめている。

これからこのサンバシがいかに復元されるのか、それは子どもたちとともに実践的に考えていきたい。実は、「昭和 30 年代」、地元の人たちが自分の意思で橋をかけていたその湖は今完全に滋賀県と国土交通省という行政管理の中で、サンバシひとつをつくるにも「公有地の占有許可」という法的手続きが必要となる。1964（昭和 39）年に河川法が改正され、琵琶湖とその周辺の河川が一級河川化される中で、法的にも、湖は住民の手から離されてしまった。

13 「自ら知る」困難をどう乗り越えるか

ふりかえってみると、「調査」という学問業界の公認された方法は、調査する自己と調査される他者を分別して、調査する自己を政治的にも社会的にも優位に立たせる社会的装置である。それに対して、住民自身が調査をするしかけとしての「自ら知る」という思想的社会的流れは、日本においては、明治以降の地方学や柳田國男の郷土研究の方法論に展開されたものであり、私たちの生活環境史研究もこのような思想性につらなるものである。

宮内は、市民調査の系譜を「民間学」などの流れから整理しながら、その社会的要請として、（1）NPO などの市民セクター自身からの要請、（2）市民参加型政策プロセスからの要請、（3）市民のエンパワメントからの要請という 3 つの社会的ニーズを指摘する［宮内，2003］。そして、市民調査は手法の選択の自由度、実践的な説得性への願望、問題解決の主体と調査主体の

「近さ」ゆえに、「職業的研究者による調査研究の簡易版ではなく新しいパラダイムの調査研究である」という。

とはいえ、ここまで「自ら」とは何かと問うことなしに、漠然とある事件や社会事象が起きている「現場に近い人間（たち）」と言外に意味づけてきた。しかし「自ら知る住民調査」という時に最も本質的な問題は、「自ら」とは何か、という問いだろう。松田素二が鋭く指摘するように、「調査するもの」と「調査されるもの」の異質性は、似田貝香門が主張するような「共同行為としての調査」というようなくくりの中で解消されるものではない［松田，2003］。すでにあることを「調べよう」とイメージすることが、生活者感覚とは異なる認識のアポリアにはいりこむことになる。そのような立場の違いをどう考えるべきか。松田は、中野卓の言う「異質性をそのままにして両者（調査者と被調査者）は交換できる」という共同行為論を、現在袋小路にはいっているフィールドワーク論を突破する可能性の方向としてみる。カテゴリー化された人種や性、年齢という排他的で自閉的な自己意識を超えるところから、生活世界におけるセルフ間の創造的で発見的な共同性の構築の可能性をみる。その根源は鳥越皓之がこだわる本居流の新国学の現代的再生であり、感性を理性とわけることなく、「心と生活感覚で」社会に接近する回路の可能性でもあろう［鳥越，2002］。

感性と理性の融合の回路を、ある意味で実践的に方法化しているのが、吉本哲郎らの「地元学」であろう。水俣病により患者が不条理な受難を受けただけでなく、地域社会の崩壊の危機にも直面してきた水俣を舞台に、吉本哲郎は、「水俣にはたくさんの専門家が調査にやってきたが、どれも調査結果は水俣の外にもっていかれてしまい、肝心の地元には何も残らなかった」という無念さから、「調べた人しか詳しくならない」という発見をし、1990 年代初頭から「地元学」を構想する［吉本，2001］。地元学で吉本が焦点を当てるのは、「食」と「廃棄物」（ゴミ）である。魚を食べるという行為の中で、廃棄物により汚染された魚がもたらした生活現場での公害を吉本は、その生活領域の中からテーマ化する。吉本の方法的自覚の中には、高坂のいう missed opportunity という目論見が埋め込まれており、地元学の方法には、

「自ら知ることの困難」はあらかじめ構想されている。つまり「自らは自らのことを知らない、知りにくい」ということから、地元学では、最初から「土の人と風の人がともに」調べる活動の方法を開発し、今や、地域自治政策の重要な方法として、各地の自治体で採用されはじめている。

吉本は大地や水に生かされてきた人びとの生活記憶と実践が、モノとして存在している、そのモノ性に徹底的にこだわる実証主義の中から、暗黙の生活心性に迫ろうとしている。吉本の方法は読み替えていくと新国学の思想性にもつながる。その背景には、水俣病という日本資本主義の周辺において徹底した近代の病理を引き受けながらも、逆にそれゆえに、魚も鳥もわが生活世界の中に共感的に存在する仲間とみる縄文的な心性が隠されている。水俣病患者の杉本栄子［栗原，2000： 129–146］や緒方正人［緒方・辻，1996］、そしてその文学的世界を深める石牟礼道子などの思想［石牟礼，2004］がこの縄文的世界の表現ともいえるだろう。

琵琶湖は水俣と同時代性とともに異質性をもっている。その比較の中で琵琶湖問題における認識と実践の深みを見極めることができると最近直感的に思いはじめているが、これは今後の私自身の研究の課題でもある。

本論ではやや素朴に二項対立的な制御論と共感論を柱としてきたが、人と人、人と自然の関係性の総体としての幸せは、両者がともにバランスを保っているあやうい均衡点の中に動態的に存在するものでしかないだろう。住民による環境調査にかかわり続ける私自身は、環境社会学の学としての方法を求めるという自らの立場と役割を自覚しながら、その異質性ゆえにさまざまな現場との新しい出会いを楽しみ、そこに幸せを見出している融通無碍な存在でもある。

文献

琵琶湖研究所編（嘉田由紀子責任編集），1992，『シロウトサイエンスのサイエンス』大津：琵琶湖研究所.

Bourdieu, 1980, *Le sens pratique,* Paris : Minuit.（＝1988，今村仁司・港道隆訳『実践感覚 I』東京：みすず書房.）

Douglas, M., and A. Wildavsky, 1982, *Risk and Culture : An Essay on the Selection of*

the Technical and Environmental Danger, Berkley/London : University of California Press.

井阪尚司・蒲生野考現倶楽部編，2001,『たんけん・はっけん・ほっとけん――子どもと歩いた琵琶湖・水の里のくらしと文化』京都：昭和堂.

石牟礼道子，1969,『苦海浄土――わが水俣病』東京：講談社.

嘉田由紀子，1989,「日常生活と環境認識」鳥越皓之編『環境問題の社会理論』東京：御茶の水書房，146–165.

――――，1992,「ホタルの風景論――ホタルを通してみた水環境認識」古川彰・大西行雄編『環境イメージ論――人間環境の重層的風景』東京：弘文堂，35–79.

――――，1997,「生活実践からつむぎだされる重層的自然観」『環境社会学研究』7 : 72–85.

――――，2000,「身近な環境の自分化――科学知と生活知の対話をめざしたホタルダス」水と文化研究会編『みんなでホタルダス――琵琶湖地域のホタルと身近な水環境調査』東京：新曜社，192–220.

――――，2001,『水辺暮らしの環境学――日本と世界の湖から』京都：昭和堂.

――――，2002,「自然と生活の距離――昭和 30 年代を見る眼」『科学』2002 年 1 月号：34–44.

――――，2003,『水をめぐる人と自然――日本と世界の現場から』東京：有斐閣.

嘉田由紀子・古川彰，2000,『生活再現の応用展示学的研究――博物館のエスノグラフィーとして』草津：琵琶湖博物館.

嘉田由紀子・大西行雄，1992,「野外調査と電縁ネットワーク――パソコン通信による地域情報の発信と咀嚼」野村雅一編『情報と日本人』東京：ドメス出版，83–105.

嘉田由紀子・遊磨正秀，2000,『水辺遊びの生態学――琵琶湖地域の三世代の語りから』東京：農山漁村文化協会.

髙坂健次，2004,「頻ニ無辜ヲ殺傷シ――幸福と不幸の社会学序説」『先端社会研究』1 : 1–52.

栗原彬編，2000,『証言　水俣病』東京：岩波書店.

松田素二，2003,「フィールド調査法の窮状を超えて」『社会学評論』53–4, 499–514.

宮原浩二郎，2000,『臨床の社会学』東京：新曜社.

宮本常一，1984,『忘れられた日本人』東京：岩波書店.

宮内泰介，2003,「市民調査の可能性」『社会学評論』53–4 : 566–578.

水と文化研究会，2000,『みんなでホタルダス――琵琶湖地域のホタルと身近な水環境調査』東京：新曜社.

村上陽一郎，1979,『科学と日常性の文脈』東京：海鳴社.

緒方正人語り・辻信一構成，1996,『常世の舟を漕ぎて――水俣病私史』福岡：世織書房.

Polanyi, M., 1966, *The Tacit Dimension*, Gloucester : Routledge.（＝1980，佐藤敬三訳,『暗黙知の次元』東京：紀伊国屋書店.）

桜井厚，2002,『インタビューの社会学』東京：せりか書房.

鳥越皓之，2002,『柳田民俗学のフィロソフィー』東京：東京大学出版会.

鳥越皓之・嘉田由紀子，1984,『水と人の環境史――琵琶湖報告書』東京：御茶の水書房.

梅棹忠夫，1969,『知的生産の技術』東京：岩波書店.

脇田健一，1995,「環境問題をめぐる状況の定義とストラテジー ――環境政策への住民参加、滋賀県石けん運動再考」『環境社会学研究』1 : 130–144.

柳田國男，1935,『郷土生活の研究法』東京，刀江書院.

吉本哲郎，2001,「風に聞け、土に着け――風と土の地元学」『増刊現代農業』52 : 190–255.

遊磨正秀，1992,『ホタルの水、人の水』東京：新評論社.

Control or Communication? : The Shape of Happiness Seen in Environmental Researches Conducted by Local Residents

Yukiko Kada*

■Abstract

Do we view the forests, lands, and water that surround us, and the living organisms that inhabit them, as things we can control? Or as things that we try to develop a greater understanding or communication in our everyday lives? This simple question can highlight exceptionally important differences in social research paradigms. The answer provides the framework from which we decide what to study and implicitly determines the direction of our environmental policies.

This study epistemologically shows that the so-called "difficulties involved in social researches" become even more complex when thinking about the survey methodologies used in environmental sociology, the study of the interaction between the environment and people. This explains the difference between the meaning of "the environment" as recognized empirically by so-called specialists and governments, and the meaning of "the environment" as recognized interpretively by residents based on the way they think about the environment in which they live. Next I will show how this difference in the way "the environment" is defined forces us to deal with practical political positions and issues of power and ethics inherent in survey research.

Based on these kinds of epistemological and pragmatic frameworks, the author uses examples from actual water environment researches of Lake Biwa that have been planned and implemented over more than 20 years to show the methodological purposes of the survey research that has been conducted by local residents, and to show how those methods could be used by the authorities to conduct

*Kyoto Seika University, Lake Biwa Museum

creative and interactive, survey research.

Key words : environmental sociology, environmental awareness, resident researches, material presentation-interviews, Lake Biwa